
妄想男子の日常

あげぱん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想男子の日常

【コード】

N8998I

【作者名】

あげぱん

【あらすじ】

ただ妄想してただけなのに…

思春期男子の妄想の続編？

一応、続編です

全ては妄想から（前書き）

お久しぶりです

妄想シリーズ

第二弾です

この作品は

思春期男子の妄想

の続編となっています

まだ

前作をお読みでない方は

先にそちらを読んでから

戻ってきてください

全ては妄想から

寒い…

朝の冷たい空気で

俺は起きた

たしか俺、刺されて

死んだはず

まさか、夢か……

リアルすぎる夢だった

昨日の妹の件や

学校での件

ここ最近、

散々な目にあつた

でも

昨日の一件で

目が覚めた

妹を守るはずの

兄が

妹を泣かすなんて…

俺は

生まれ変わる！

とりあえず

謝ろう

朝食の前

妹の部屋にいき

謝ったが

妹は

何のこと？と

いつてきた

どうやら

覚えてないみたいだ

よかった

今日からは

真面目に生きる

学校にいくと

友沢が絡んできた

「すごい、エロ動画

見つけぜ」

「そうか」

「何だよ、ノリ悪いな」

「俺、そういうのもういいよ」

そういつて

俺は自分の席に着いた

そういえば

Rの予習してなかった

やばい

俺は急いで

かばんから教科書と

ノートをとりだした

予習し始めて

数分……

わからねえ

英語は苦手だ

俺が頭を悩ませていた時

突然、隣から

「ああー、予習やってないんだ！笑」

声の主は

隣の席の佐原ユキだった

佐原は北川景子似の
美人だ

スタイルも抜群！

巨乳というより

美乳なところが

またいい

実は好きだったりする

「昨日、寝ちゃって…」

「じゃあ、あたしの見せてあげる」

「ほんとに？ありがとうございます」

ラッキー！

予習忘れたおかげで

佐原さんと喋れた

佐原さんのおかげで

なんとかRを乗り切ることができた

授業後…

「ノート、ありがとう。本当に助かった」

「いいよ。困ってたみたいだったから」

(私の方こそありがとう。話す機会できたし)

「そつだ、何かお礼を。最近、オープンしたばかりのイタリアンのお店があるんだ。今度、ご飯とかどうかな？」

「そんな、気を使わなくていいよ。ノート貸したただけなんだし」

(本当は行きたいけど、すぐに答えたら、ちょっと図々しいよね。次にOKしよう)

「そつだよ。じゃあ、ご飯は諦めるよ。ありがとう。」

(しつこい男は嫌われるっていうしね。ここは諦めが肝心)

「うん、また何か困ってたらいつてね」

(ええ、誘わないの？普通、三回は誘つよね)

はああ

また今度、誘うか

この日は

何も進展のないまま

終わった

お互いに片想いと

思っていた二人

実は両想いだつた

嫌われることを

恐れて積極的になれない

カオル

二人の恋はどうなるのか…

さよなら童貞く君と過ごすこれからの日々く（前書き）

結局

またまたエロに走りました

まあ

仕方がないです

しつこいですが

エロがダメな方は

ご遠慮ください

てか

エロくない人って

いるのか……………

さよなら童貞君と過ごすこれからの日々

昨日は

お互いに意識しすぎて
何も進展しなかった

だから、今日こそは
佐原さんのアドレス
聞いちゃおう
って思ったんだけど
昨日、金曜日

.....
今日、土曜日
= 休み

せっかく話しやすい
状態だったのに
この土日で
リセットされてしまう

俺は
ふとんの中で
考えていた

時刻はすでに
9時を過ぎていたが
起きる気分になれなかった

再び

眠りにつこうと
したその時

ピュピュピュ

突然、携帯の着信音が
鳴った

この長さは
電話だ

「もしもし」

「カオルくん？ユキだけど」

「佐原さん？なんで電話番号知ってるの？」

「聞いちゃった」

「誰に？」

「秘密」

「秘密ですか」

恐らく篠田茜だろう

あいつは

社会的で誰とでも
友達になれる

俺からみた

篠田は顔はかわいい

性格は悪い

俺に対してだけだが…

「もしもし、聞いてる？」

「あつ、聞いてるよ」

「じゃあ、カオルくんの家の前で待ち合わせね。じゃあ、後でね」

「えっ、うん。じゃあね」

しばらく

何が起こったのか

わからず放心状態でいた

これって

デートなのか

デートだよな！

待ち合わせは

俺の家

俺の家でデート

いい感じになる

キス

エツチ

きたー！ー！

俺にも春到来！

親父にもらった

コーム

まだあったかな

つて

待てよ

初デートで

初エツチってありえるか？

普通ありえないよな…

まあ、

俺だからありえるか

デートが楽しみだなあ

一時間後

10時

俺の家の前にて

「ごめん、待った？」

「全然、今きたところだよ」

(家からでてきたただだから当然である)

「じゃあ、おじやましませう」

(きたー この展開、予想通りだ)

「どござ」

2時間後

俺は昼食

……………ではなく

ユキを食べていた

事の発端は

ベッドの下に隠してあったエロ本から始まった

「ああ、こんなの読んでるんだ。カオルくんのエッチ」

「いや、これはその……………」

「そんなのみなくとも私の見せてあげるのに…」

「えっ、今なんて？聞こえなかった」

「ううん、何でもない。」(でも、今ならいいやすい雰囲気かも)

「ねえ、カオルくん。

エッチしよっか？」

「いいの？俺、暴走するかもしれないよ」

「カオルくんなら優しくしてくれるって信じてるから大丈夫」

その直後

俺はユキを押し倒していた

そして

まずキスをした

柔らかかった

次は

やっぱり胸だ

やはり予想通り

ユキは美乳だった

大きさはCと行ったところだろうか

俺の好きなサイズだ

もんでいると

時々、ユキが小さく喘いでいた

それが

俺の脳に大量のアドレナリンを放出させた

「今度は私がするね」

そういうと

ユキは俺のエクスカリバーを触ってきた

正直

すでにいきそうだった

ユキの奉仕を

楽しんだ俺は

ついに挿れた

腰が抜けそうだった

気づけば

もう午後6時をすぎていた

やばい、あまりの気持ち良さに7回もやってしまった…

もうくたくただ

結局

デートというデートは

せず

ただ体を求めあったただけだった

午後8時

俺はユキとメルアドを
交換した

(普通、逆だろ！)

腰が抜けてたてなくなっていたユキを
おぶって送った帰り道

どんっ

「いてなあ！何ぶつかってんだよ」

「すみません」

「すみませんじゃねえよ
お前、ちよっとこいよ」

路地裏に

連行される俺の運命は
いかに……………

アーリマンの誘い(前書き)

アーリマンとは

ゾロアスター教の神の一つです

善の神がアフラマズダ

悪の神がアーリマンです

今回の話は

そんな悪の神に誘われたような悲劇的な話です

この作品を

読み終わった方には

お祓いをオススメします

この話に藤村という人物が登場します

- ・貧乏揺すり
 - ・リズムをとる
 - ・ビックマウスになった
 - ・ち こが短くなった
 - ・早漏になった
 - ・幼女を誘拐しなくなったなど他多々
- これらのうち一つでも
あてはまる方は

藤村にとり憑かれている可能性があります

すぐに

最寄りの神社で

お祓いをしてください

さもないと

あなたは藤村みたいに
なります

アーリマンの誘い

月曜日

ああ

ついにやってしまった
なんか顔をあわすのが
恥ずかしい…

しかし
なんだ、何か嫌な予感が
する

気のせいならいいんだが…

朝のホームルームで
俺は絶望した

鬼畜、本田が席替えをするというのだ

本田がわからない方は
前作、思春期男子の妄想 参照
せつかく

彼女、いや彼女なのか？
でも、エッチはしたし
彼女だろ

待てよ、最近では
遊びでっつてこともある

とりあえず

隣の女子といい感じなのにここで席替えなんて
鬼畜だ

まあいい

俺は

もてる全ての童貞力を
使い再び彼女の隣に
舞い戻る！

ん？

そういえば

二日前に俺は……………

すでに童貞じゃねえ

くそお

こんなときあの力が
あれば……

結局

普通にくじを引いた
俺は絶望ともいえる
席になった

1番前の席だ

しかも、となりは

藤村……………

ここで

藤村について説明しよう

藤村は

一言でいうとマントヒヒ

マントヒヒは

自分の子孫を残すために

幼い雌を誘拐して

大きくなったら

やる性質をもつ

さらに

昼間は他の雄と喧嘩を

してるが夜になると

集まって寝るといっビビりだ

簡単にいうと

幼女誘拐、ビビり

つまり

ロリコンでビッククマウス

ということ

次に

見た目は性犯罪者のような容貌をしている

笑顔は

援交しているおっさんだ

体重は90

ここまで

説明すれば

やつがどれだけ最低な

単細胞生物かわかるだろう

俺はそんなやつと隣の席になったのだ

あと一ヶ月

堪えられるだろうか

ここで初めていうが

今は七月で

もうすぐ夏休みなのだ

この日から

俺の地獄の日々が

始まった

ある日の授業中

貧乏揺すり&リズムとり

ある日の放課後

ストーキング

ある日の休み時間

きもい声

そして

ある日の夜

メールでユキに

絶交された

原因はもちろん

あいつだ

やつは

女子は当然のごとく

男子からも嫌われている

そんなやつに絡まれている俺と知り合い もとい彼女だと知られた
くなかったのだろう

でも

納得できない

自分が理由なら

いいが

やつが理由でフラれるなんて……………

こんなとき

サッフォーなら

この気持ちをどんな詩に
するだろう

サッフォーは

ギリシアの女性詩人です

俺はなんとなく

あの名セリフをいってみた

この世は腐ってる

神はいないのか(前書き)

今回の話は

かなりグダって

文字数も少なくてすぐに

終わります

ここまで

ネタが思いつかないのは

藤村のせい

だと思っています

ということだ

作者はお被いした後

執筆を再開したいと思います

神はいないのか

この世が腐ってから

一日……………

教室に入った瞬間

テンションがバブル崩壊のごとく急低下した

はああ

席にたどり着くまでの間

みんなの軽蔑と同情の視線を感じた

その日一日

残念な日を過ごした

帰りに

さらに悲劇が起きた

やつが

一緒に帰ろうとやってきたのだ

当然、無視をしたが

やつはついてきた

こうなれば

もう俺の学園生活は

終わったに等しい

クラスだけでなく
全校生徒に知られてしまったのだ

二週間後

終業式をむかえた俺は
やっと解放された
と
安堵し
よく堪えた
と
自分を称賛した

しかし

この二週間で

俺が失ったものは大きい

友達、彼女、信用、生活
全てを失った

俺の人生は

ここで終わるのか……

神の落とし物（前書き）

いやあ

お被いもすみ

清々しい気分です

これからは

できるだけ頑張って

更新しますが

遅れることも多々あると
思います

そのときは

またこの作者

とり憑かれてるよ

と罵ってください…

神の落とし物

長かった夏休みが終わり

九月一日

また

学校生活が始まった

相変わらず

俺はまだやつ隣の
テンションが低い…

だが

今学期は一学期と

違う点がある

それは

交友関係が復活したことだ

これは

夏休みに俺が奮闘した
成果である

この話は

また後日話すことにしよう

さて

話を戻すが

交友関係を復活することができた俺に
もうひとつ嬉しい出来事が起きた

なんと
やつを嫌いという理由で
クラスのみんなど
意気投合し
1対39という勢力図になった！

まあ
数人の男子は
心が広くやつと普通に
接しているが………

その精神力を
わけてくれ

つと
こんなことをいってる場合じゃない

今日
実行する作戦を
諸君に説明しよう

・藤村孤立作戦
昼の弁当の時間、やつを
一人にする

以上

えっ
それだけ？………

言葉にしてみれば
短い
精神的ダメージは
相当なものはずだ！

よし
作戦実行

4限のチャイムになると
みんな
俺の机に集まった

もちろん
やつが入るスペースはないむしろ、やつが入るには
宇宙並の空間が必要なわけだが……………笑

やつは
机を少しこちらに傾け
必死にこちらのグループに入ってこようとした

しかし
俺達はやつにわからない
話題をし
完全スルー

なんて華麗な作戦なんだ
きもいな……………

結果

やつは早く食べ終え
普通に接してくれる
グループのほうに絡みに
いった

それから
俺達のパーティーの開始だ
前島が
もってきたじゃがりこを
食べながら

やつの愚痴、武勇伝（残念な）を喋った

自分では
かなり有意義な時間を
過ごした

やばい
楽しすぎる！

これから
毎日やりたい作戦だ

やべ
興奮しすぎて
鼻血でてきた

俺はエロ少年じゃないよ

彼を

孤立させること

一週間………

彼は以前より少し大人しくなった

しかし、ちよつと喋ってもらつとかなり調子に乗る

だから

絶対に情けをかけるな

話かわるが

やつにとり憑かれているかのような

不運の持ち主、東を紹介しよう

東は

やつと同じ中学で

あまり交友はなかったらしいが

高校に入って

同じ中学ということだ

喋っていたが

多くの友人ができた今

もう彼は不要だ

しかし

彼は東を離さない…

ある日の

放課後

俺は前島と

最近でたゲームの話で
盛り上がったいた

気づいてみると
彼の姿はなかった

ラッキー！

今日の犠牲者は俺じゃない

安全が確定した俺は
前島と話し終わったあと
山本と家路に着いた

山本は
現在、氷河期に突入中で
俺と同じ状況だ

ああ
春来ないかなあ……………

俺達の帰りの日課は
東にDEAD OR ALIVE?
と送ることだ

最近、DEADと返ってきた
ことしか記憶にない

それは

彼が待ち伏せしているからだ

東はチャリで

学校にきている

だから

やつはいち早く

駅にいき

待ち伏せをする

なんて

やつだ！

気色悪すぎる！！

もう存在自体が犯罪だ

あんなやつ

この世にいていいのか？

まあ

神がまだ生かしているということは今後何かに役立つのだろう…

豚足？

まずくて無理

バイオ燃料？

むしろダイオキシンの

発生する

俺には
神の考えることは
わからん

突然、山本がいった

「やつに彼女がいたって本当なのか？」

「本当だぜ。ただ会ったことはあるんだが顔はあんまり覚えてないんだ」

「まじか。なんかショックだ」

「顔を見たことあるやつがいつにはゴリラみたいだったらしいぜ」

「www。マントヒヒにゴリラ、なんかお似合いじゃね？」

「たしかに。でも、どんなやつでも彼に先を越されたのは男としてショックだ」

「あんまり気にするなよ。ゴリラで妥協するより俺達はちゃんとした女の子と付き合おうぜ」

「そつだな」

ん？

待てよ、何か忘れてるような……………

なんだったかな？

そうだ

俺は彼女がいたことがある彼のせいでフラれたが
エッチもした彼女が…

どうする？

今更、俺

一回も春きてねえよ

と聞いたことを訂正するか？

いや、めんどくさい

このままにしておこう！

バスを降り

駅のホームで

彼の愚痴を語り合う

俺達の前に

一人の女の子が

落ちてきた……………

「いてて、何が起こったんだ？」

俺は突然

自分の上に落ちてきた女の子が何者か不思議でならなかった

すると

突然、女の子は

立ち上がり

「エツチしよ」

(俺達)「ええー」

その名はアリス(前書き)

いやあ、久々の更新です？

なんだかジャンルがわからなくなってきましたが
気にせずお読み下さい？

その名はアリス

この状況はなんだろう………

今、俺は自宅の自室にいる。

普段なら、ごろごろと暇をもてあましてるはずだが

今は違う。現在進行形でとてつもなく奇妙な状況なのだ

それはこの謎の美少女の存在

こいつは一体何者なのだろう…

その前になぜこいつが

俺の家にいるか説明しておこう

話は2時間前にさかのぼる…

「エッチしよっ!」

(俺達) 「えええええ」

「これはどういうことだ。また俺に幸運がきたのか!じゃなくてお前、誰だよ?」

「私は、アリス。あなた専用のラブドール」

「まじすか…なんで俺専用なの?」

「わからない。でも、そうインプットされてる」

「そうなんだ…」

「おい、なんか変なのに憑かれたな。笑」
山本がちやかすように言った

「笑い事じゃないぜ。お前、預かってくれよ」

「俺のそこは親いるし無理だわ。てか、お前専用なんだから俺じゃ無理だろ。まあ、せつかくのチャンスなんだから楽しみよ」

「そんなあ…」

「感想おしえてくれよ。ああ、羨ましい」
そんなこんなで結局、俺が預かることになった。

はあ、先が思いやられる…

*

「ねえ、エッチしようよ。私はあなたの性奴隷なんだよお。めっちゃくちやにしてよ」

何いつてんの、この人…
何気にすごい発言しちゃってます。これはガチで危ないんじゃないだろうか？

自分のことを性奴隷といっている時点でかなり危険な気がするが…

「その前にお前について詳しく教えてくれ」

「ええ、先にエッチがいい」

「だめ。質問が先。俺がご主人さまなんだろう？」

「そうだけど… むううう」

「まず、どうやってここにきたの？」

「落ちてきた」

いや、それはわかってるんですけど……

「そうじゃなくて、なんで俺のところにきたかだよ」

「覚えてない。覚えてるのはアリスはカオルの大人のおもちやっ
ことだけ」

……

「覚えてないなら仕方ないなあ」

「じゃあ、エッチ……」

「っっていうとも思ってたか？」

すかさず俺のインターセプト！
われながらいいところで決まった

「一人暮らしだからお前を置いてやることはできるが変なやつだから嫌だ。ということを出て行って」

「そんなひどい。アリスと一緒に住めばエッチし放題だよ。こんな幸せなことないよ」

「男がみんなエロいと思うなよ。少なくとも俺は、紳士だ。変態と
いう名の紳士だ。」

「結局、変態だからエロいんでしょう…」

ガーン…

俺、あほだ…

「それはおいといて、仕方ないから俺の家に住んでもいいよ」

「やった。じゃあ、」

「そのかわりエッチはなしだからな」

「ええ、ケチ」

「ケチで結構」

こうして俺（人間）とアリス（ラブドール）の奇妙な生活が始まっ
た…

*

翌日…

俺は山本から質問攻めにあつた

「なあ、どうだった？気持ちよかったか？やっぱり手でするのは違うか？」

「いや、俺してねえし。さっきからその話ばかりうるさいよ」

「なんだ、してねえのか。もったいねえなあ。ラブドールだからかなりリアルにつくられてるから本物そっくりの快感が ажわえるだろ…」

「あれはラブドールの域を超えてるだろう。しゃべってる時点で不自然だよ」

「本当だ。よく考えればあの娘、喋っていたな。ん？今の世の中に喋るラブドールなんてあるのか？」

「ないだろ。空から降ってきたんだから宇宙人じゃないの？」

「宇宙人もラブドール使うのか？なんかグロいな。宇宙人の」…
想像したくねえ」

「気持ち悪いだろ。そんなの想像すんな」

「てか、案外、あの娘、なにかの神かもしれないぜ。普通ではありえないことなんだから。もしかしたら、何か目的があつてこつちに来たのかもしれないし一回聞いてみるよ」

「あいつが神？信じられないな… とりあえず帰ったら聞いてみるよ」

*
帰宅後

「ねえ、お前って神なの？」

(ぎくっ)

「えっ、ナンノコト？」

「おい、なんかカタコトになってるぞ。」

「ソッ、ソンナコトナイヨ…」

「本当のこと言えよ。そうしないと、追い出すぞ」

「むううう、わかった、わかりました。本当のこと言います」

「その気になったか」

「ご主人さまのいうとおりアリスは神です。」

えっ、ガチだったの？

カマかけただけだったのに…

山本すげえ、恐るべき推測…

「じゃあ、神さまが何しにここにきたんだよ」

「実は、今天界は少子化で人口がかなり減ってきてるの。だから、子ども増やすためにかっこいい人探してたとき、たまたま下界をみたらご主人さまがいて、かっこよかったからつい見とれてたら落ち

ました…」

天界なのに人口って人っていう感じ使っているのか？
てか、俺がかっこいい？
生まれて初めて言われた
俺、天界ではイケメンなのか？

「そうなんだ。事情はわかったよ。それでエッチしたがってたんだ
な」

「うん。だから、エッチしてくれるよね？」

「嫌だ」

「えええ〜、今の流れるにする感じだったよね…」

「俺、天界にいつてみたい。連れてって！」

「何言ってるの？普通の人間が生きていけるところじゃないと思う
よ」

（ん？ちよつと待てよ。このまま天界連れていく アリスの部屋
エッチ！おおお、いいかも）

「いいよお、天界に連れていってあげる」

こうして俺は天界に行くことになった……

この後

おれがどのようにして天界にいったか？

天界はどこなところだったか？

それはまた別の話である……

楽園？へ（前書き）

なんか作者もわけがわからなくなってきました…

ということでは

フリーペーパーをみるような気持ちで

読んでください…

楽園？へ

今、俺は空を飛んでいる
これは夢か？いや、現実だ。
だって、俺はこれから天界に行くのだから…

*

天界に行くことになった俺は
いろいろと持っていくものを準備していた

「なあ、天界って日本のお金使えるのか？」

「使えないよ。天界にはソフィアっていうお金があるの。」

「へえ、そのソフィアっていうのは円にするとどのくらいなんだ？」

「1ソフィア、250円くらいかな？」

「えっ、そんなにするのか… 高いなあ。じゃあ、物価も高いってことだよな？」

「日本と比べるとそうだね。でも、天界ではそれが普通だから気にならないよ」

「そうか。よし、準備できた。早速いこう」
とりあえず必要だろうと思われるものをかばんに詰め込んだ俺は
そういった

ちなみに

俺のかばんの中身

- ・ 食料（ポテチ、じゃがりこetc・・・）
- ・ 水分（フアント、お茶etc・・・）
- ・ 携帯
- ・ サバイバルナイフ

以上

このくらいしか思いつかなかつた…

「どうやって天界に行くんだ？」

「飛んで行くの」

「えっ？飛ぶ？」

「うん、飛ぶ」

「飛ぶっていったてここには空を飛べる乗り物なんてないぜ」

「そんなのいらないよ。とりあえずアリスにつかまって」

俺がアリスの手をつかんだその時

アリスの背中から純白の羽が現れた

きれいだぁ

やっぱりただものじゃない、こいつ…

2 3 4 5 6 7 8
「俺、死ぬんだ……」
1
d e a d ……………

「なんてね」

ぎりぎりのところでアリスが俺の身体を支え上昇した

「楽しかった？」

「馬鹿か、もう少しで死ぬところだったんだぞ」

「だって、落してみろよっていったじゃん」

「恋愛でって意味だよ」

「そういう意味だったのかぁ。アリス馬鹿だからわからなかったぁ、ごめんねえ」

確信犯だ、こいつ絶対にわかってやったんだ

いつか、犯してやろう

いや、駄目だ

そんなことをしたら俺の恋愛してからやるっていうポリシーに反するあれ？はじめてした時、俺、恋愛してたかな？

まあ昔の話はいいか

忘れよう…

*

アリスに連れられて

空の旅を楽しむこと1時間…

ようやく天界についた

「ここが天界かあ」

そこはまさに天国だった

中世ヨーロッパを思わせる建物

それは世界史の図説でみた光景そのものだった

でも、ひとつだけ

図説と違うことがある

それは…

空にあるということ…

見る人見る人に羽が生えていること…

「どう？天界の感想は？」

「すげえ……………」

「それだけえ？わかった、驚きすぎて言葉にならないんだね」

その通りだ

この厳かな雰囲気…

圧倒される・・・

「最近の流行でいうと…なんもいえね…って感じ？」

「いや、それ、ちょっと古いだろ」

アリスの変な冗談？のおかげ？で
圧倒されていたが平常心に戻った

「じゃあ、案内するからついてきて」

その後

彼が生きてもどることはなかった……

「勝手に殺すな！」

次回、天界編始まります…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8998i/>

妄想男子の日常

2010年10月19日23時54分発行